

重度障害者の表情 捉える



「研究成果を入所者の理解のために」と語る松本さん（野洲市で）

センターには、重度の障害がある10～80歳代の約130人が入所している。

今回の研究は、寝たきりで言葉がなく、反応を捉えづらい重度障害者の20歳代男性を対象にした。固定したビデオカメラで顔や上半身を撮影し、映像をパソコンに取り込む。動きの履歴を表示、記録できるソフトウェアを利用し、一定の時間に眼球や鼻、口、胸など6部位のうち、多く動いた部位と回数を解析しグラフ化した。安静な状態での動きと、職員が男性

重症心身障害者施設の優れた実践研究に贈られる「第14回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の取組賞に、「びわこ学園医療福祉センター野洲」（野洲市）が選ばれた。重度障害者の表情のわずかな変化を捉え、意図や感情、状況を客観的に理解するための研究を行った作業療法士松本明香さん（37）は「入所者一人一人に、より快適に過ごしてもらうために、研究成果を職員間で共有できれば」と話す。

（名和川徹）

読売療育賞取組賞 びわこ学園医療福祉センター野洲

6部位解析しグラフ化「眼球の動き 意図の表れ」

その結果、いずれの場面でも男性は眼球の動きの増減が他の部位に比べ最も多いことがわかった。松本さんは「眼球の動きは気づきや意図の表れで、男性とコミュニケーションを取る際の手がかりにすることができると考える」。

職員たちは従来、この男性の筋肉の緊張や表情、顔色の変化、目の動きの増減を見ながら、「驚いたのかな」「話すことを聞いてくれている」などと理解してきた。今回、カメラなどを利用して動きを可視化したことで、より客観的な理解につながると期待する。

今後は実践研究で使用したシステムを、対象者を広げて活用する。入所者への理解をより深めるため役立てる考えた。

受賞には「びっくりした」と笑顔を見せる。表彰式があった会場では、他の施設の研究発表も聞いた。「どこの施設でも同じような困難さがあり、それを克服するために皆さん頑張っているんだと思った。日々の業務は大変だが、こうした取り組みを積み重ねていきたい」と意気込む。